

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・I・U・Eのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ ○ ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 思いがけない展開に肝を潰してしまった。
- (2) 道路の幅員が減少する。
- (3) 観葉植物に賦活剤を与える。
- (4) 磁石の同じ極同士には斥力がはたらく。
- (5) 人は相身互い、助け合うことが大切だ。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 街路樹の葉がコキザみに揺れている。
- (2) 庭石をきれいにフチする。
- (3) 社会で活躍するにはセサイが大切だ。
- (4) フジヨウリな判定を非難する。
- (5) この分野はあの会社のキンジョウトウチだ。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

窓帷かすまひをあけて、みつ子は窓から庭を見降おろした。やはらかな朝の日射ひざしが、ふかぶかと花壇の草花にふりそゞいでゐる。

姉はカーネーションの花が好きだった。花壇の隅に美しく咲き誇ほつてゐる桃色の花を眺めながら、みつ子は姉のことをしきりに想おもひつゞけた。きらきらと映へた外光はもの懐なつかしく流れてゐる。

姉様がお嫁に行つてしまつてから、もう一年たつたのだ。みつ子は今更のやうにそんなことを考へた。行つた当座は少すくなくも、一週に一度は必ず手紙を寄越よこしたけれど、それもいつの間にか怠り勝がちになつたと見へて……。

「あ、さうだ。」と、みつ子は恰あたかも突然何かを見出みいだしたやうに点頭うなづいた。……「ふた月ばかり前に絵葉書はがきをたつた一枚寄よこしたきりなんだ。」

今更そんなことは考へて見る程のこともないのだが、ふとさう想ひ出して見ると、みつ子は何だか姉が恨めしく思はれてならなかつた。別れるとき、あんなにも堅く、ふたりで涙をこぼして約束したにもか、はらず……「お姉様もずるぶんだわ！」とみつ子は思はずには居られなかつた。

お姉様が居なくなつたら、此方こちはどんなに淋さびしいか？ 私はどうなつたらないか？ 夫等それらのことは姉様の方が余程よく承知してゐる筈はずなのに——等などとみつ子は、夫から夫へと、とりとめもなく姉の幻を追つてゐるうちに、いつか涙が頬を伝ひ初めてゐたのに、自分は気が付かなかつた。みつ子は気がくしゃくくしゃくしてしまつて、じれつたさうに窓際まじぎはを離れた。さうしてソファの中にぐつたりと身を落おとした。幾らでも泣けさうな気がする。無暗むやみに口惜くちやくしくてたまらなかつた。

「此この間うちから病氣になつて了しまつて、毎日まいにち苦くしい、日ばかり

を送りつゞけてゐます。」——そんな手紙を書いて姉を驚かせてやらうかしら、など、みつ子は考へた。——「食物たものも少しも進みません、外へ出て遊ぶ気もしません、このまゝまの日が続いて行つたら、しまひに私は……」と、そこ(1)まで考へて行つたみつ子は、その次の言葉を想像して、思はずプツと笑ひ出してしまつた。あ、私は何といふ我儘わがままな子だらう、何といふ嫌な子だらうと思つた。さう氣附くと、みつ子は急に恥はぢかしくてたまらなくなつた。みつ子は自分で自分の口をギユツと抓つかつた。——さうすると、また可笑おかしくなつた。慌あわて、立ち上あつたみつ子は、室の中をあつちへ行つたりこつちへ行つたり、あはたゞ(2)しく歩きまはつた。

「みつ子！ みつ子！」

奥の方で母の聲がした。——みつ子はハツと思つた。わけもなく頬のあつくなつて来るのが自分に感ぜられた。……まア、私は何といふ意い久く地ちなしたらう、と思つたが、どうしても返辭が出来なかつた。

「みつ子！ みつ子！」

みつ子の胸はどきどきと鳴つてゐた。何だかワツと声を挙げて泣き出してしまひたいやうな氣持きもちになつた。呼ばれた時に返辭をしないとつても叱られるのだつた。また、返辭をしないことは、大へんに悪いことであるといふことも、みつ子自身にはよく解わかつてゐた。

「みつ子！ みつ子！」

みつ子は何だか消えてでもなくなりたいうやうな氣がした。——ぼんやりして、また窓に凭よりか、つて花壇を眺めてゐた。微風があるのか、草花が軽くゆれてゐた。みつ子は眼まばたきもしないで、その草花を見詰めてゐた。

「何ですね。お前こんなところにゐたの？ さつきからお母さんが、あんなに呼んでゐたのが聞えなかつたの？」

この聲に驚いてみつ子が振り返つて見ると、母がニコニコ笑ひながら立つてゐた。みつ子は安心したやうな氣がした。それにしても母は何故なぜ

笑つてゐるのかしら——そんなことをみつ子はふいと思つた。

「聞えなかつたの？」

「え、聞えませんでしたわ。」と、うつかりみつ子は嘘をついてしまつて、「アツ、いけない！」と気が付いたので「御免なさい！」と付け加へた。

「聞えなかつたのなら、そりや仕方がないけれど、さつきからお母さんは随分呼んでゐたんですよ。——お前どうかしたの？ お腹でも痛いの？」

「い、え！」とみつ子は慌て、云つた。それで何となくきまりが悪いので、あまえるやうに笑つた。

「お母さん、何か御用なの？」

「御用があるから、呼んだんぢやありませんかね。——ちよつとお母さんのお部屋にいらつしやい。」

みつ子は何だか不安な気がした。叱られるのぢやないかしら、と思つた。さうして何かこの他に叱られるやうなことがありはしなかつたかしら、と考へて見た。——然し別にありさうにも思へなかつた。

「御用つて何ですの、お母さん？」

「まあい、から一寸いらつしやいよ。い、ものをあげますから。」と云ひながら母は出て行つた。

みつ子は急に嬉しくなつて、パタパタと足音をたて、母のあとから廊下を駆けて行つた。

居間に入つて見ると、小包が二つ程あつた。その一つには岡村みつ子様と姉の字で書いてあつた。みつ子は直ぐにあけて見たかつたが、わざとおとなしくして、母がそれを渡して呉れる迄黙つてゐた。

「それ、姉様からあなたによ、何だか自分で開けて御覧！」

みつ子がそれを開いて見ると、中から出て来たのは香水だつた。——
組合せ香水とかといふので、七種ばかりの綺麗なハイカラな香水の瓶が、

行儀よくづらりと並んでゐた。調査器が付いてゐて、何でも自分の好きな香ひを調査して用ふやうになつてゐた。*ヘリオトロープ、*ヴァイオレット、*ムゲツト、……一つ一つみつ子はレットルの横文字を読んで見た。もう一つ別の箱に一寸立派な香水吹きが入つてゐた。「みつ子様へ、京都の姉より」と箱の中のカードに書いてあつた。

「お母さん、お手紙は？」とみつ子は直ぐに訊ねた。

「お母さんにだけ来たのよ。姉様はね、此の間から加減が悪くてやすんでゐるんですつて。それでみつ子にも手紙を書きたいのだが、書けないから、よくそのことを私から云つて呉れつて、さう云つてよこしたのよ。」

(3) 母の言葉をきいてみつ子は急に悲しくなつて、ワツと声をあげて泣き出してしまつた。別に心配する程ではないのだから……と母にさんざ慰められたが、容易にみつ子はだまらなかつた。自分が余りにわが儘なことばかりを想つてゐたことが、みつ子は恥しくてならなかつたのである。

それにしてもみつ子は、姉の身がにはかに案ぜられてならなくなつた。(4) 一刻前とはまるで反対に、なつかしい姉のことを、心ゆくばかり想つて、凝つとしてゐられない位だつた。

香水の箱を抱へてみつ子は自分の室に戻ると、直ぐに姉にあて、長いお見舞の手紙を書きはじめたが、さてどう書いたら、この心配な自分の心、姉のことばかりを懐しく思つてゐる自分のあた、かい心が現はせるか？ としきりに考へた。どんな文字を用ひても、この心のま、は伝へられないやうな気がした。——いつそ止めてしまはうか、と思つて、一旦ペンを擱いて、また慌て、それを取り上げた。

とうとうみつ子は一行も書けなかつた。母に頼んで、いつそあしたでも直ぐに京都まで行かうかしら、その方が余程早手廻しだ、と思つた。……「それがい、く。」とみつ子は躍りあがつた。——みつ子はもうそれに決めてしまつて、姉にあつたら、先づ何と云はう……その

ことばかりを考へはじめてゐた。みつ子の心は、いつの間にかすつかり明るくなつてゐた。

軽い疲れを覚へたみつ子は、うつとりとした心になつて、テーブルから離れてまたさつきの窓の処へ来た。金色の陽に溶けさうに咲いてゐる草花は、丁度みつ子の心のとほりに明るく、みつ子の瞳に映つた。

みつ子はテーブルの上から一輪挿を取つて、窓枠の日当りに置いた。それにはカーネーションの花が挿してあつた。みつ子はその花に、そつと唇をふれて見た。かすかな花弁の冷たさが胸にまで快くひびいた。

みつ子は何心なく、姉から今送られた香水吹を、手持無沙汰を紛らすために取りあげて見た。——さうしてスポイトを軽く指先でおして見た。

日当りのいゝ窓に置かれたカーネーションの花に、香水の霧がさんさんと降り灑いだ。⁽⁵⁾金色の陽の光りと香水のしぶきと、薄紅色の花の香とが巧に溶け合つて、みつ子の瞳に不思議な恍惚を覚へさせた。

(牧野信一「香水の虹」による)

〔注〕ヘリオトロープ——ムラサキ科キダチルリソウ属の総称。

ヴァイオレット——スマイレの花。

ムゲツト——スズランの花。

〔問1〕⁽¹⁾「そこまで考へて行つたみつ子は、その次の言葉を想像して、思はずプツと笑ひ出してしまつたとあるが、「思はずプツと笑ひ出してしまつた」のはなぜか。五十字以上六十以内で説明せよ。

〔問2〕⁽²⁾「……まア、私は何といふ意久地なだらう、と思つたが、どうしても返辭が出来なかつた。とあるが、みつ子は何を「意久地なし」だと思つたのか、その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 姉を恨めしく思いながら、自分からは具体的に手紙を書くこともせず、母を介して尋ねることもしない自分を、母親に何も言つてこない姉と同じだと思われのが嫌で返事をしなかつたこと。

イ 約束を破り、手紙を寄越さない姉への思いを募らせて、そんな姉を困らせてやろうとあれこれと考えてうその手紙を書いてしまつた自分を、母親に見られるのが嫌で返事をしなかつたこと。

ウ 母に内緒で誰もいない部屋に入り込み、一人であることをいいことに、姉への思いを巡らせて楽しんでいた自分の秘密の時間と空間を、母親に侵されるのが嫌で返事をしなかつたこと。

エ 姉のことを考えているうちに、心の置きどころがなくなり、自分でも気持ちにまとまりをつけられずにあたふたしている自分の姿を、母親に知られるのが嫌で返事をしなかつたこと。

〔問3〕⁽³⁾ 母の言葉をきいてみつ子は急に悲しくなつて、ワツと声をあげて泣き出してしまった。とあるが、このときのみつ子の心情の説
明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 姉への恨み言を考えていたが、それも姉の健康を前提とした思いであつたので、母の言葉が意外すぎてどうしていいかわからなかつた。
イ 体調が悪くても妹への思いをプレゼントに託していた姉の心も知らずに、薄情だとして色々な恨み言を考えていた自分が情けなかつた。
ウ のんきにうその手紙などを考えていた自分への罰として、姉が病気になるってしまったのだと感ぜられて、自責の念にさいなまれている。
エ 自分は姉への思いを長々と手紙に書こうとしていたのに、姉からはプレゼントはあつたが、待つていた肝心な手紙が無く悲しんでいる。

〔問4〕⁽⁴⁾ 「一刻前とはまるで反対に、なつかしい姉のことを、心ゆくばかり想つて、凝つとしてゐられない位だつた。とあるが、どんなことに対して「まるで反対」なのか、その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 背中を向けて去って行きそうな姉を恨めしく思つて、驚かせてつらい思いを晴らそうと思つていたこと。
イ 母からの呼びかけに返事もせず、恋しい姉のことをひとりで思い続ける時間を大切に感じていたこと。
ウ まったく便りの無かつた姉から素晴らしいプレゼントが届いたことに、ほつとして喜んでいたこと。
エ 姉からの手紙が全く無いのは、自分への思いが途絶えてしまったからなのだと思しみにくれていたこと。

〔問5〕⁽⁵⁾ 金色の陽の光りと香水のしぶきと、薄紅色の花の香とが巧たくみに溶

け合つて、みつ子の瞳に不思議な恍惚くわうこつを覚へさせた。とあるが、

この小説のこの場面としては何を表現していると思われるか、その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 思いがけずに生じた光と霧とのコラボレーションで色とりどりの空間を想像させることで、自分の思い込みに翻弄されてきた「みつ子」の曲折した心情の変遷を象徴する形で表現している。

イ 香水を吹きかけることによるしぶきの浮遊感を演出することで、まもなく姉に会えるという「みつ子」の安心した様子を周りの情景から浮かび上がる形で表現している。

ウ 姉をイメージさせるカーネーションと、姉から妹への思いのこもった香水を取り合わせることで、「みつ子」にとっての、姉との望ましい関係を印象深い形で表現している。

エ 姉から贈られた香水を陽光の下で吹きつけて一瞬の虹を出現させることで、その虹のはかなさに、病んだ姉の様子を重ねてしまう「みつ子」の戸惑いを比喩的な形で表現している。

〔問6〕 本文の内容や表現について述べた説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 周りにある庭や花壇や花の姿を主人公が見ることを、物語りを動かす際のきっかけに使っている。

イ 心情描写と情景描写の並列を、感情を表に出さない主人公の細かな心の揺れを表現するために使っている。

ウ 母と主人公との言葉のやり取りのちよつとしたズレを、思春期の少女の複雑な思いを表現するために使っている。

エ 姉と主人公の思いの微妙なすれ違いを、大きな隔たりのある大人の世界と少女の世界を表現するために使っている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

* ムーアの議論はマルクス主義理論の文脈上に立てられているが、そのエッセンスはもつと一般的な言葉遣いでも表現することができる。経済人類学の基本的洞察が示す通り、人間の経済は、商品の交換のみによって成り立っておらず、その外部には交換以外のつながりを通じて流れる物質／エネルギー代謝の営みが広がっている。そうした営みを名指す典型的な表現は「贈与」である。交換が人間と人間のあいだの対等な関係に基づくとなると、贈与には贈るものと贈られるものとのあいだの非対称性があり、もつとも根源的な贈与は自然から人間への贈与である。⁽¹⁾自然からの贈与に対して、贈られる側の人間が感謝と畏敬を捧げる⁽²⁾形式は人類史に普遍的といつてよいであろう。

しかし近代以降、人間を歴史の主体とし、自然をそうした人間による主体的制作の素材や客体とみなす人間観／自然観が浸透すると、自然からの贈与は(対価を求める主体が不在の)モノの収奪に転化した。その転化の時期や過程をどこに同定するかは、ここで論じるには大きすぎる論点である(ムーアは16世紀に起源を置き、経済システムだけではなく、植民地主義や科学の観点を強調して複合的にこれを論じようとしている)が、自然からの贈与が、対価の不要な収奪へと読み替えられたことで、人間の経済は無限に開かれることになり、不断の資本蓄積の体制としての資本主義が生まれたということに異論は少ない。この意味で資本主義は、それによって外部化し不可視化される収奪を基盤として成立しており、資本主義をその全体として捉えるならば、この収奪の領域を含めて捉えなければならない。ここにムーアがウォーラーズテインの用語である「資本主義的世界＝経済 capitalist world-economy」に替えて⁽³⁾「資本主義的世界＝生態 capitalist world-ecology」という概念を立て

る根拠がある。経済という語は、商品交換の体系に搾取の領域、言い換えれば人間だけで構成された社会的関係の領域に、資本主義理解を閉じ込めてしまうからである。

ここであらためて注意すべきは、すでに述べたように、資本主義的世界に生態の概念は、単に世界システムの概念を社会の領域から自然の領域にまで拡張しただけのものではないということである。というのも、収奪の対象となるモノは、社会の外側にあらかじめ「自然」に存在するものではなく、むしろ資本主義によって、社会と自然の界面においてたえず見いだされ、つくり出され、つくり直されているものだからである(さらにいえばそうしてモノがたえず作り直されることで、「社会」と「自然」の境界線自体もたえず引き直されている)。このことは資本主義の「限界」を考える枠組みを大きく変える意味を持つ。

自然が資本主義の外部に端的にあるのではない以上、一方に社会の次元でのメカニズムとして資本主義的な経済があり、他方にその外部に収奪の対象となる自然があると捉えた上で、前者が後者を蚕食^{さんじよく}して次第に食いつぶし、やがて限界にぶつかるといふかたちで、資本主義の限界を捉えることはできない。これまで見てきたように、自然が固定的な所与ではなく、社会との関係で動的に現れるものだとすれば、その自然の限界もまた動的に現れるものだからである。⁽⁴⁾これは資本主義に限界がないということの意味するわけではない。ある歴史的局面で静的にみたとき、オイケイオスは必ずしも無限に流動的なものではない。むしろ社会的過程としてある所与の技術体系には一定の安定性があり、そのもとで現れる自然には実体的に限界がある。だがより長いスパンで見れば、資本主義と自然とのあいだには動的な共一生産の過程があり、資本主義に収奪される自然そのものがつくり出され、つくり直されることで、自然の限界もまた動的に(再)定位される。

1972年にローマクラブが「成長の限界」を説いたころ、「あと30

年で石油はなくなる」と言われていた。それから50年経った現在石油がまだ尽きていないのは、この意味で自然の有限性が動的なものだからだ。だが、この事実を指摘する論者がしばしば混同するのは違い、有限性が動的であることは、無限であることを意味するわけではない。石油がまだあるからといって、私たちがいま生きている資本主義と共一生産された自然にそれ自体としての限界があることを否定できるわけではないからである。

50年前に早晩なくなると言われていた石油がまだなくなっていないこととの背後には、海底油田からオイルシェールやオイルサンドまで含む新たな採油源開発、代替エネルギー開発、省エネルギー技術の開発など、石油の生産と消費の両面にわたるさまざまな技術革新がある。そういった技術革新を促す大きな要因は石油そのものの価格である。石油の価格が上がれば、それまでは採算の取れなかった採油源の開発や代替エネルギーの開発に経済合理性が生まれ、追加的なコストを払っても省エネルギー技術を採用するインセンティブが生まれる。そしてこのプロセス自体が資本主義と自然の共一生産として起こっている。つまり資本主義と自然の界面に、頁岩や砂岩の隙間に貯留された原油、沖合を吹く卓越風、あるいはバイオエネルギーの原料としてのトウモロコシなどが新たな私たちで「自然」として現れる。

このような技術の介在による資本主義と自然の共一生産は、さまざまな時間的スケールで生じる。レアメタルのように近年のデジタル革命に促されたものから、サトウキビやコーヒーのように近世初期のグローバリ化に起源をもつものまで、およそ今日グローバルな市場で「コモディティ（商品）」と呼ばれている一次産品の多くは、資本主義と自然の共一生産が顕著に表出する前線である。

他方、時間的スケールを広げ、より深い次元に降りて、資本主義と自然の共一生産を見れば、現象としての技術革新のベースには、均質な空

間への地球の地図化、いわゆるクロックタイムの浸透、実験などの実証的方法を通じた自然についての知識獲得など、コスモロジーや自然観そのものの変化がある。この意味で、資本主義と自然の共一生産は、一方で自然に条件づけられた資本主義が、他方で資本自身の想像にもとづいて自然を創り出す過程だといえることができる。

先に触れたようにムーアは、このような意味で自然の超歴史性を否定し、マルクスとエンゲルスが『ドイツ・イデオロギー』で使った「歴史的自然」という概念を参照させている。人類史のなかの異なる文明や、あるいは資本主義の異なる歴史的局面において、自然がそれぞれ異なる「歴史的自然」として現れるという見方は、所有権、特に生産財の所有権の捉え方にも関係する。

というのも、一般に消費財の所有権は、秩序維持のための占有の保護として、極論すれば先占を尊重するチンパンジー社会の秩序にまでさかのぼるほど超歴史的に一般的であるのに対し、生産財——その典型は土地であるが——の所有権は、社会全体の生産力向上のための労務投下・資本投下の保護として設定されてきた。逆に言えば、労務や資本の投下が有益である場合にのみ所有権が保護されてきたということである。

だが、具体的にどのようなモノが、労務や資本の投下が有益となる生産財の地位を占めるかは、その社会が何を価値としてどのような技術を有しているかによって大きく変わる。いわば生産財の所有権は、必ずしも連続的ではない歴史的な自然の遷移にともなう再設定されるのだ。だとすれば、たとえ(5)入会地(村落共同体の共有地)が近代化にともなう排他的な私的土地所有のもとに置かれていくのは、特に金融資本によって土地が商品として流動化させられて成立する、資本主義と共一生産された歴史的自然においては必然性があるが、普遍的な歴史のゴールであるとは限らないことになる。ごく端的にいえば、なにが所有の対象になるかは、価値と技術の相関のなかでなにが収奪の対象となる

かによって決まる。一見普遍的に見える近代的な私的所有権もまた歴史的限定のもとにあり、歴史的・自然的遷移によって、そのかたちは変わっていく。

(山下範久「資本主義にとっての有限性と所有の問題」による)

〔注〕ムーア——アメリカの社会学者。

マルクス主義理論——ドイツの社会学者マルクスが提唱した経

済理論に基づく考え方。

ウォーラーステイン——アメリカの社会学者。

オイケイオス——自然と社会が相互に影響し合っている状態や、

相互に影響し合う自然と社会の関係性のこと。

インセンティブ——行動を促す刺激や動機。

エンゲルス——ドイツの社会学者。

〔問1〕⁽¹⁾ 自然からの贈与に対して、贈られる側の人間が感謝と畏敬を捧

げる図式は人類史に普遍的といってよいであろう。とあるが、この図式の具体例として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 自然からの恵みを守るために、生態系を壊さないようにする。

イ 星を結んで星座を作り、神話のストーリーを楽しむ。

ウ 豊作を祝う祭りを毎年秋に行い、お酒やお米をお供えする。

エ 動物を家畜化することによって、無駄な乱獲を避ける。

〔問2〕⁽²⁾ 自然からの贈与は（対価を求める主体が不在の）モノの収奪に転化したとはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 自然からの贈与は、典型的なエネルギー代謝の営みの一つになったということ。
- イ 自然を対象化して、人間に必要なものを取り出すだけの存在としたということ。
- ウ 人間は自然を収奪の対象にして、交換という対等な存在に位置づけたということ。
- エ 自然そのものが時代により変わったので、贈与の形も同じく変わったということ。

〔問3〕⁽³⁾ 「資本主義的世界」生態 capitalist world-ecology」という概念を立てる根拠があるとあるが、その「根拠」を解答欄の「ため」に続くように五十字以上六十字以内で説明せよ。

〔問4〕⁽⁴⁾ これは資本主義に限界がないということの意味するわけではない。と筆者が述べるのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 資本主義の収奪の対象が変化しても、自然が無限にあるわけではなく、境界が変わるだけであって対象の有限性は変わらないから。
- イ 自然と社会の関係を考慮に入れると、資本主義自体には限界がないが、人間の技術や経済には限界があるということだから。
- ウ 「資本主義的世界」生態」の概念を前提とすると、社会と自然の境界線は動的なもので、どこが限界なのか定められないから。
- エ 「資本主義的世界」経済」から「資本主義的世界」生態」に変わったように、資本主義の理解の仕方は無限に変化していくものだから。

〔問5〕⁽⁵⁾ 入会地（村落共同体の共有地）が近代化にもなつて排他的な

私的土地利用のもとに置かれていくとあるが、これはどのような具体例として挙げられているのか。その説明として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア ある土地については、所属する集団全体の所有であることに意味があつたはずなのに、近代以降の民主主義社会では、個人の権利を制限するために分割されなければならなくなつたということ。

イ ある土地については、所属する集団全体で管理することが意義をもつていたものなのに、近代では、経済的存在としての個人に恒久的な所有を証明することを求めるようになったということ。

ウ ある土地については、多くの人が自由に立ち入れることが価値を生み出していたのに、近代社会では、責任の所在を明確にするために個人の所有権が設定されたということ。

エ ある土地については、多くの人にとって意味のあることに価値が置かれていたのに、近代になって、経済的な価値が優先され個人の所有の欲求の対象になつたということ。

〔問6〕 一見普遍的に見える近代的な私的所有権もまた歴史的限定のもの

とにあり、歴史的な自然の遷移によって、そのかたちは変わつていく。とあるが、あなたが考える「一見普遍的」だと思われるものが「歴史的」な「遷移」によって形を変えたものを、本文で挙げられているもの以外で具体的に示したうえで、そのことについてあなたの考えを二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄や、や。や。「などもそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、【 】内は現代語訳を補ったものである。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「はかない」とは、もともと「はか」が「ない」ということである。「はか」とは、「イネやカヤなどを植え、また、刈ろうと予定した範囲や量」のことで、「はかがいく」「はかどる」の「はか」のことである。つまり、「はかない」とは、基本的に「つとめても結果をたしかに手に入れられない、所期の結実のない意」で、「これといった内容がない。手ごたえがない。あつけない」という意味になった言葉なのである。

さらに、「はかない」には、「はかる」ことができないという意味合いもふくまれる。「はかる」とは「はか」の動詞化したものであり、そのさまざまな「はかる」に対応して、それが「できない」ところに、「はかない」という状況が生まれてきたことである。

さて、その「はかる」は、きわめて多様な意味をもっている。漢字で見るとわかりやすい。まず、ものごとを計量するという「計る」「量る」「測る」がある。つぎに、そうして計量したものをもとに、あれこれ調整・案配したり推測したりする「衡る」「付る」や、「会議にはかる」の「諮る」がある。そして、そうしたものをまとめて何ごとかをもくろみ企てるといふ「図る」「策る」、さらには「謀る」がある。

つまり、「はかる」ということは、人がある意図・計画をもって生活するときには、かならず求められる基本的な営みということができるとして、とりわけそうしたことが突出して強調されてきたのが、近代・現代の科学技術的な考え方なのである。

科学技術の基本的な発想は、ものごとをすべて「はかり」にかけ、数値（デジタル）化し、それをもとに目標を立て未来へと向かっていくというところにある。

そうした「はか」あることが第一義となつていゝ社会が、いわゆるビジネス（busy＝忙しい）社会ということである。ここでは、何より「はかる」こと、「はか」ばかしく結果を手に入れることが求められてきたのである。しばらく前までの、日本の母親の叱り言葉の第一位が「早くしなさい」だったのは象徴的である。

(1) しかし現在、そうした「はか」あることだけを求める考え方の根幹がぐらつてきた。環境問題やエネルギー問題もからんで、ひたすら未来にむかつて成長目標を立て、結果・成果のみを手に入れようとする発想が頭打ちになつてきたということである。その意味でも「はかない」状況が現出してきているのである。

「はかなさ」は、基本的にはむしろネガティブな意味内容をもつていゝが、しかし同時に、そこにおいてこそ可能であるような、何かしらポジティブなものを見いだすことができる思想感情でもある。つまり「はかない」ということは、単なる気分ではなく、それをそれとしてきちんと自覚することにおいて、これまでの「はか」第一主義のビジネス社会の「忙しさ」のなかで、心亡ぼしてきた――「忙」といふ漢字は心亡ぼすという意味でもある――何ものかを取りもどすことができるのではないかといふことである。

近代日本の出発点で、東洋・日本の美を西欧に紹介しようとした岡倉天心は、こういう言い方をしている。

はかないことを夢に見て、美しい取りとめのないことをあれやこれやと考えようではないか。
（『茶の本』）

あえてなされたこうした言い方には、あらためて、生きるこの人生の「はかなさ」を積極的に受けとめようとする決意をうかがうことができが、それは、「茶道の要義は「不完全なもの」を崇拜するにある。い

わゆる人生というこの不可解なものの中に、何か可能なものを成就しようとする やさしい企てである」(同) といった茶道理解の本質にもつながる。

「はかなさ」とは、まずもって、そうした「不完全さ」を感得する感受性である。が、かといってそれは、「不完全さ」のままに停滞・揺蕩するということではない。「不完全なもの」を崇拜しつづ、そのうちに何かしら「可能なもの」を成就すべく「やさしく」企てられているのが茶の道だというのである。「やさしさ」とは、人の弱さや傷つきやすさなど「不完全」なことに敏感なことであり、そこに、ひかえめに、わざとらしくなく関わっていくことのできる能力である。

そのことはさらに、「真の美はただ「不完全」を心の中に完成する人によってのみ見いだされる」、「何物かを表わさずにおくところに、見る者はその考えを完成する機会を与えられる」、「「不完全崇拜」にさげられ、故意に何かを仕上げずにおいて、想像の働きにこれを完成させる」、等々と説明されてくる。

『茶の本』に一貫している、こうした考え方は、同時に、東洋・日本の美の要諦でもあると捉えられているが、いうまでもなくそれは、ひとり天心の発明ではなく、無常感といわれてきたものの美学の、いわば近代的な整理の仕方にすぎない。「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり」(芭蕉「笈の小文」の「二」の中身の問題である)。

中世までにできあがってきた日本の代表的な美的理念のひとつである「幽玄」とは、「詞に現れぬ余情、姿に見えぬ景気(言葉にはこれこれと語られない余情、姿の上にはつきりと見えない気配・雰囲気)」(鴨長明『無名抄』)と説明されるものである。

「雨にむかひて月を恋ひ、たれこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情けふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見所多

けれ」【雨に向かつて月を恋しく思い、すだれを垂れた部屋に引きこもって、春がどこまで暮れていったのかを知らないのも、やはりしみじみとした感じがし、情趣の深いものだ。今にも咲きそうな頃あいの桜の梢花の散りしおれている庭などこそ、見所の多いものである】(『徒然草』)などは、その好例であろう。満開や満月の「完全なもの」だけに執着するのではなく、「はかなく」移り行くものとして、そこに身をそわせることにおいて見いだされてきた美のあり方である。「世はさだめなきこそいみじけれ」世は「はかる」ことができなからこそ味わい深いのだ」と。

「幽玄」を大切な美のひとつと説く世阿弥らの能では、さらに、「秘すれば花なり。秘せずは花なるべからず」(『風姿花伝』)とも説く。観客にあたえる能の美しさとしての「花」は、すべてをあからさまに表現するところではなく、切りつめられた表現、秘められた表現にこそ咲くというのである。

むろん「わび」茶にも、同様の趣向がある。「わび」とは、派手で豪華なものに対して、質素で欠落したものの中に求められた美であるし、「わび」と並び称されてきた「さび」もまた、閑寂・枯淡な味わいのうちに、より洗練された美を味わおうとするものであった。

以上のような美意識は、いずれも、いうなれば「不完全なもの」を崇拜しつづ、「人生というこの不可解なものの中に、何か可能なものを成就しようとする」ところに発見された美ということができであろう。「はかないことを夢に見て、美しい取りとめのないことをあれやこれやと考えようではないか」とは、そうした覚悟の表現なのである。

(竹内整一『おのずから』と『みずから』による)

〔注〕 岡倉天心——明治時代の日本の思想家。

宗祇——室町時代の連歌師。

雪舟——室町時代の水墨画家。

利休——戦国時代から安土桃山時代の茶人。

鴨長明——平安時代末期から鎌倉時代にかけての歌人、随筆家。

世阿弥——室町時代の能楽師。

〔問1〕⁽¹⁾ しかし現在、そうした「はか」あることだけを求める考え方の

根幹がぐらついてきた。とあるが、どのようなことか。次のうち

から最も適切なものを選べ。

ア 近代以降の科学技術の発展と科学的な思考によって豊かな未来を實現しようとしたが、成果を求め続ける日々に疲弊しきった人々が、現実世界の過酷さから目を背け始めているということ。

イ 近代以降の科学技術の発展と科学的な思考によって何事も効率よく計画し、成果を出すことが求められるようになったが、常に成果を出しつづけることの限界と苦しさは露呈し始まったということ。

ウ 近代以降、科学技術によって世界の全てを明確に把握し、目標を立てて確実な成果を求めてきたが、現在では人々がひたすらに成果を出し続けようとしても、科学的思考に限界がきているということ。

エ 近代以降、実質的な成果が求められ続けてきたが、豊かな生活がある程度かなえられた現代では、物質的な充実を重視しつつも、抽象的で心理的な充実感が求められるようになったということ。

〔問2〕 やさしい企てとあるが、どのようなものか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 人生そのものが不完全なものなので、日々の積み重ねの中に完全さを求めていき、ゆっくりにあるが、不完全な部分を次第に減少させようとする試み。

イ 実現していない欠落部分を嘆くのではなく、いまだ実現されざるものとしての豊かな可能性を夢想し、欠落を修復したうえで、新たな価値を生み出そうとする試み。

ウ 不完全なものは、弱さや心理的なもろさといったどんな人間にもある「不完全さ」を象徴するものとみなして、それとなく自然に受けとめようとする試み。

エ 不完全なものが内包する、いまだ実現されざるものとしての豊かな可能性を得し、欠落があるからこそ見ることでできる新たな世界を提示してみせる試み。

〔問3〕 すべてをあからさまに表現するとあるが、この内容に相当する三字の部分を、本文中の『風姿花伝』の引用部分中からそのまま書き抜け。

〔問4〕⁽⁴⁾ そうした覚悟の表現なのであるとあるが、「そうした覚悟」とはどのようなものか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 「幽玄」も「わび」も「さび」も決して無条件に肯定される美とは言えないが、不可解なままでも対象の中に美を積極的に見だし、把握しようとする覚悟。

イ 「幽玄」も「わび」も「さび」も内に秘められた見えない美と言えようが、概念的であるからこそ時空を超えた普遍的な美を対象のなかに見いだそうとする覚悟。

ウ 「幽玄」も「わび」も「さび」も一般的に評価される美とは呼べないものであるが、よく分からないながらも想像力を駆使して、鮮明な美を浮かび上がらせようという覚悟。

エ 「幽玄」も「わび」も「さび」も伝統的な無常感に基づいて現実的な情感を抑制した表現であるが、その根底に流れる多様で豊かな感情表現を探究し、評価しようという覚悟。

〔問5〕 次の発言は、本文を読んだ後に、生徒たちが意見を出し合ったものである。本文の内容を正しく踏まえての発言として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 筆者は岡倉天心の「美しい取りとめのないことをあれやこれやと考へようではないか」を出発点として発展した日本古来の美的感覚もち出して、退廃的な現代社会に鋭く切り込もうとしているね。

イ 芭蕉が「貫道する物は一」と表現しているように、時代により状況が変わったとしても、常に変わることに無いものに美が宿っていると捉えることが日本の伝統的な美的感覚の特徴なんだね。

ウ 『徒然草』の「雨にむかひて月を恋ひ」は完全なものの良さを認めながらも、不完全を大切に扱う美意識で、現代社会が喪失しつつある感覚を取り戻させてくれるものだね。

エ 岡倉天心、芭蕉、鴨長明、『徒然草』の言説を概観することで、時代ごとの美的感覚の移ろいの延長として、現代社会の「はか」第一主義の美徳を感得することができるね。

3
—
□

□

五
□